

しものせき・竹アンサンブル活動報告

吉原達也

An activity report of the Shimonoseki Bamboo Ensemble

by

Tatsuya Yoshihara

要旨

山口県下関市を拠点とする竹楽器楽団「しものせき・竹アンサンブル」は平成16年に発足し、竹を用いた楽器製作、演奏活動を行ってきた。本稿では、「やまぐちバンブーオーケストラ」として発足して現在に至る経緯、楽器の紹介と作成方法、演奏曲目、ボランティアによる演奏などの活動内容を報告する。今後も竹楽器の魅力を伝えると同時に、教育現場での活用を模索していきたい。

キーワード：民族音楽、民族楽器、竹楽器、手作り楽器、バンブーオーケストラ

1. はじめに

山口県は全国第四位の竹林面積を有する県である⁽¹⁾。本稿では、放置すると山林を荒らしてしまう竹林を整備するボランティア団体が母体となり結成された、竹楽器を制作し演奏する楽団「しものせき・竹アンサンブル」の十年をこえる活動を報告する。

2. 「やまぐちバンブーオーケストラ」と「しものせき・竹アンサンブル」について

山口県は平成10年3月に「やまぐち里山文化構想」をまとめ公表した⁽²⁾。昭和30年代以降の社会経済状況の急激な変化を受けて、森と人との関係が疎遠になり、山が荒れ、里山は人々の心からも活動からも遠い存在になりつつある。「里山文化構想」では里山を再生し、新しい里山文化を創造することを理念として掲げ、里山づくりの運動を全国に発信した。その具現化に向け、竹楽器による音楽活動を通じ、竹の魅力と里山のすばらしさを広く伝えていく県民楽団「やまぐちバンブーオーケストラ」が平成16年5月に発足した⁽³⁾。

下関市王喜地区で荒れた里山の竹林整備活動を行っている里山ボランティア活動グループ「かぐや姫の里づくりの会」を支持母体に、楽器製作から演奏まですべて自ら実施する県内初の楽団として、平成16年11月に「第45回全国竹の大会 山口県・萩大会」でデビューした(図1)。楽器製作、演奏については尺八奏者・竹の音楽家として国際的に活躍する柴田旺山氏が指導にあたった。

平成17年3月には「しものせき・竹アンサンブル」(代表:村田悟)として会則を定め、地域での活動をより活性化させることとした。筆者は指揮・指導、編曲を担当している。メンバーは主に社会人で、現在28名である。

その後、平成17年には山口市に「バンブーレゾナンス・やまぐち」、平成18年には岩国市に「いわくに竹楽坊」が結成され、「やまぐち森林づくりフェスタ」などのイベントでは集結し、「やまぐちバンブーオーケストラ」として演奏を行った。平成18年の「第21回国民文化祭・やまぐち2006」では下関市立王喜小学校の児童も加わり(図2)グラッドフィナーレを飾った(図3)。平成19年には山陽小野田市に「高泊たけの子オーケストラ」、平成21年には萩市に「はぎの竹音」が結成され、平成24年の「第63回全国植樹祭やまぐち2012」では総勢130人で天皇皇后両陛下のお手植え、お手まき、ご退席の音楽を演奏した。現在各グループが各地で活動を継続している。

3. 竹楽器の演奏

「しものせき・竹アンサンブル」で使用する竹楽器、演奏する楽曲を紹介し、活動する中で工夫や気付きを述べたい。

3・1 竹楽器の種類

竹楽器は主に東南アジアの民族楽器をモデルに、山口県の真竹、孟宗竹などで作られているが、概要を紹介する。

ソプラノ・竹マリンバ(写真1)

インドネシアのチャルンやジェゴグをモデルにして孟宗竹で作られた竹琴である。音域はG3～G5のクロマティックである。ゴムの塊に竹串を刺したマレットを用いるが、西洋のマリンバ用のマレットのほうが性能が良いので本グループではそれを用いている。マレットの素材



写真1 ソプラノ・竹マリンバ

によって音色を変えて表現することが出来る。トレモロ演奏が可能である。

作り方は、まずAの部分の長さを決めるが、叩きながら徐々に切り詰めていき調律する(図4)。その後BとCの部分を徐々に切り詰めていくと、急に響の良くなる長さが見つかるので、そこで止める。

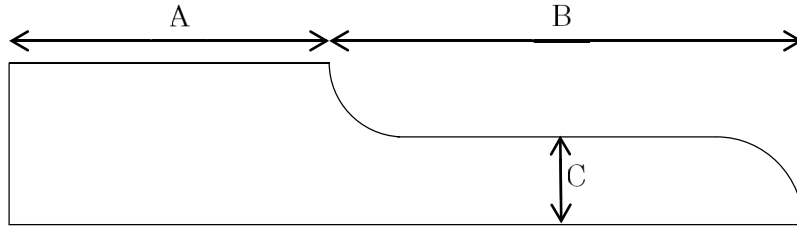


図4 竹マリンバの作り方

バス・竹マリンバ (写真2)

低音の竹マリンバである。孟宗竹が用いられている。音域はC3～G4で派生音はF#とBbのみである。

作り方はソプラノ・竹マリンバと同様である。

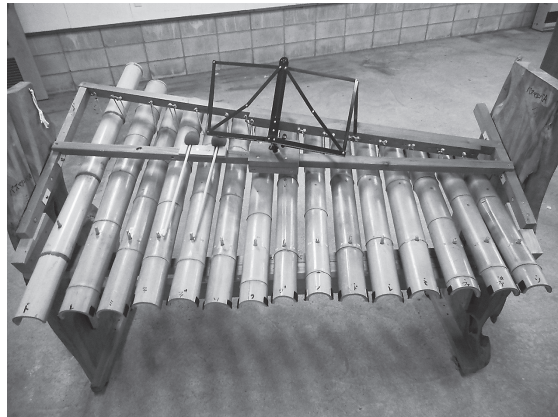


写真2 バス・竹マリンバ

ソプラノ・クロンプット (写真3)

ベトナムの楽器をモデルに真竹で作られている。音域はC3～G5のクロマティックである。丸く切ったウレタンに竹の柄をつけたもので、竹の筒を塞ぐように空気を送り込んで音を出す。トレモロは困難であるがポンポンと非常にユニークな音色を奏でる。

作り方は底以外の節を抜き、長さを切りながら調律するだけである。

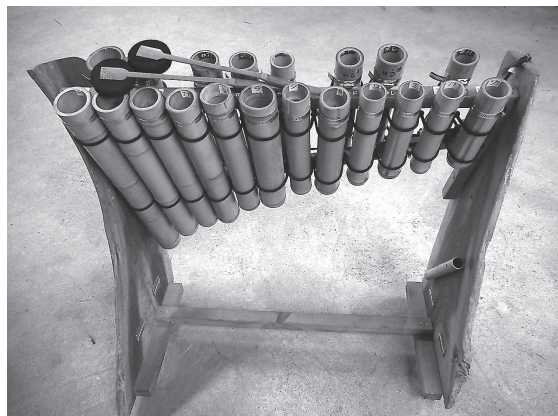


写真3 ソプラノ・クロンプット

バス・クロンプット (写真4)

低音のクロンプットである。真竹が用いられている。音域はC2～G3のクロマティックである。

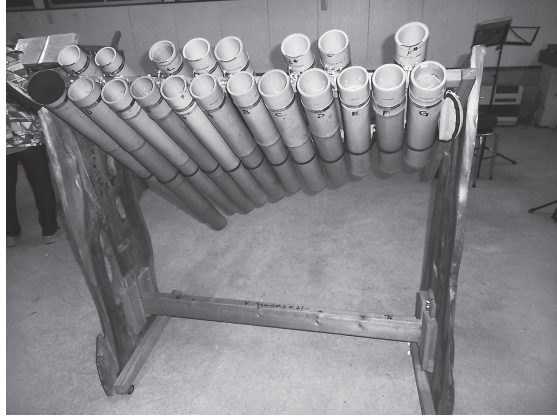


写真4 バス・クロンプット

ジェゴグ (写真5)

竹マリンバの形状であるが、1.8m～2.8mの長さの孟宗竹を用い、重低音を発する。音域はG1～G2である。派生音はない。



写真5 ジェゴグ

アンクルン (写真6)

インドネシアの楽器である。台からぶら下げ、あるいは1音ずつ手に持ち、震わせて音を鳴らす。竹マリンバ状の竹に足をつけ、共鳴筒の穴にはめ、縁に当たるようにする。

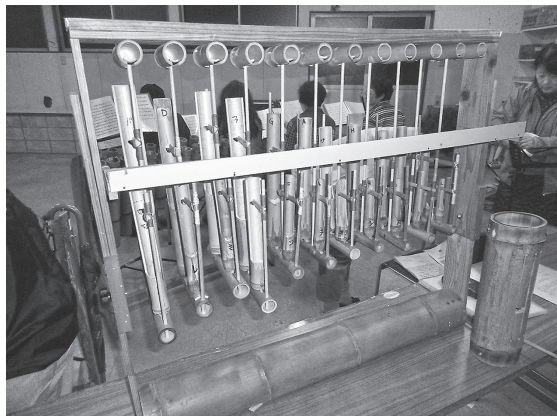


写真6 アンクルン

篠笛（写真7）

唯一日本の伝統楽器である、篠竹を用いた七穴の横笛である。八本調子（C調）を使用している。



写真7 篠笛

これらの楽器の材料は、すべて竹林から伐竹したものであるが、楽器として使用するにはまず油抜きを行わなければならない。油抜きは熱湯に少量の苛性ソーダを加えて煮る方法と、火で炙る方法がある。詳しい作成方法については山口県農林水産部森林企画課が平成19年に作成したDVD「里山から生まれるシンフォニー ～つくってみよう、奏でてみよう竹楽器～」に記録されている。

調律は、竹の切断による音程の上昇は比較的容易であるが、下降させるためには材料の接着やガムテープの貼付で質量を増やさないといけないため困難である。従って制作時に最も気を配らなければならないのが材料の切り過ぎである。常に多めに長さを取り、調律しながら切り進めていかなければならない。完成後の調律の狂いは少なく、完成後7年で調整をしたのみである。

保管は湿度の多い時期には換気をしないとカビが生えることがあり、温度変化の大きい場所では竹が割れる場合がある。

制作当初は楽器の持ち運びを考慮していなかったため、演奏場所への移動には3tトラックのドライバン、パワーゲート付きが必要であったが改良し、台の取り外しや折りたたみができるようになり軽トラックや普通車での持ち運びが可能となった。その結果レンタカーの経費が必要なくなり、ボランティアでの演奏も多く引き受けられるようになった。

3・2 楽曲

竹楽器で演奏する楽曲は、その楽器の素朴な音色から、童謡、唱歌、民俗音楽などが適していると考え、市販の楽譜がないため、すべて編曲をしなくてはならない。その際には各楽器の音域、奏法を考慮しながら行っている。また、バスマリンバには派生音がF#とB♭しかないため、ハ長調以外にはト長調、ヘ長調が多くなっている。竹楽器の普及のために、要望があれば今後も楽譜の提供を行っていききたい。

以下に主なレパートリーを挙げる。柴田旺山氏作曲の楽曲以外はすべて筆者の編曲である。
アイルランド・メドレー【庭の千草～サリーガーデン～ロンドンデリー・エア】、秋の子（末広恭雄作曲）あの丘越えて（万城目正作曲）あまちゃんオープニングテーマ（大友良英作曲）アンパンマンのマーチ（三木たかし作曲）越後獅子の唄（万城目正作曲）丘を越えて（古賀政男作曲）オブラディ・オブラダ（レノン、マッカートニー作曲）燦めきの未来（柴田旺山作曲）クリスマス・メドレー【ジングルベル～天には栄え～きよしこの夜～ホワイトクリスマス】コーヒールンバ（ペローニ作曲）こきりこ（柴田旺山作曲）コンドルは飛んでいく（アロミア＝ロブレス作曲）ジュ・トゥ・ヴ（サティ作曲）ジュピター（ホルスト作曲）唱歌ファンタジー（南安雄作曲）世界に一つだけの花（槇原敬之作曲）千の風になって（新井満作曲）月の砂漠（佐々木すぐる作曲）遠き山に日は落ちて（ドボルザーク作曲）ドレミの歌（ロジャース作曲）涙そうそう（BEGIN 作曲）日本の四季～唱歌メドレー【いなかの四季～朧月夜～花～牧場の朝～我は海の子～里の秋～赤とんぼ～冬の夜～ペチカ】ふるさと（岡野貞一作曲）ブンガワン・ソロ（マルトハルトノ作曲）麦の唄（中島みゆき作曲）森の約束（柴田旺山作曲）やまぐちの森川海（柴田旺山作曲）

4. 演奏活動と今後の展望

「やまぐちバンブーオーケストラ」としての活動は先に述べたが、現在では「しものせき・竹アンサンブル」単独の活動を中心に行っている。その活動が認められ、第6回やまぐち県民活動パワーアップ賞を受賞し、国際ソロプチミスト東下関から助成金を頂いた。

練習場所は平成26年までは下関国際高校の校舎の一角を借りていたが、平成27年から東亜大学敷地内の旧吹奏楽部練習場を借りている。楽器を常設できる場所を見つけるために他団体は苦勞しているようだ。練習日は原則として月4回、第1第3水曜日と第2第4土曜日に行っている。

演奏活動は自主公演としては平成26年3月に「緑の募金チャリティーコンサート」（下関市民会館大ホール、ゲスト：下関少年少女合唱隊）を結成10周年の記念公演として行ったが、基本的には依頼されて演奏を行っている（図5、図6）。

その中で大半を占めるのが、老人福祉施設でのボランティア演奏である（図7）。楽器の音量がそれほど大きくなく、優しい音色であること、またその音色が童謡・唱歌や民謡に適していることなどから好評を得ている。懐かしい、馴染み深いメロディーと一緒に口ずさむお年寄りも多く、反応の良さに驚く職員の方もいる。毎年のように依頼のある施設もあり、今後も活動の中心として継続していきたい。

また、活動の原点である下関市王喜地区の下関市立王喜小学校では、学校の特色として竹楽

器演奏を継続し、下関市小・中学校音楽祭で披露している。従って、「しものせき・竹アンサンブル」のメンバーは、楽器のメンテナンスや楽器製作ワークショップ、芸術鑑賞会での演奏などの際に協力をし活動に関わっている。

今後は教育現場での活動を更に広げるために、本学学生による楽器製作と幼稚園・保育園・施設での演奏活動を実現させるべく計画、協力していきたい。

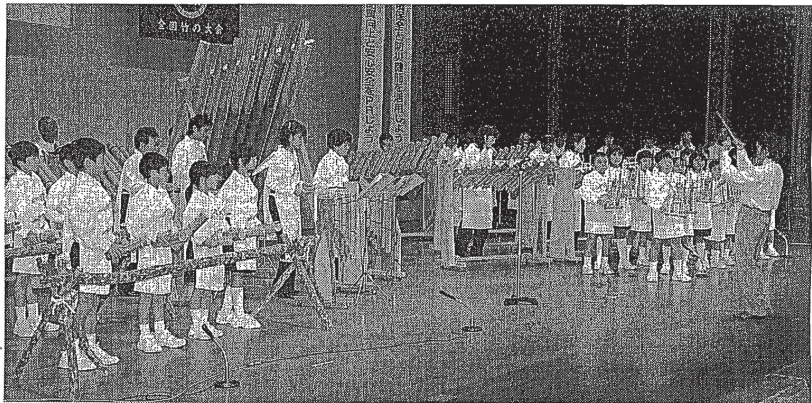
5. おわりに

竹楽器演奏は地域性を活かした身近な音楽活動であるが、里山再生のメッセージを発信し、優しい響きによる癒やしを提供する大変意義深いものである。県主導で立ち上がった活動が民間での活動にスムーズに移行して定着している状況を継続し、展開していけるよう努力していきたい。

参考文献

- (1) 林野庁：「平成 26 年度森林・林業白書参考資料」2015
- (2) 山口県林業研究グループ連絡協議会：「林業山口 8 月号」1998
- (3) 山口県農林水産部森林企画課：「やまぐちバンブーオーケストラ活動記録アルバム」2007

「やまぐちバンブーオーケストラ」新聞掲載記事（図1～3）



手作りの竹製楽器で、演奏を披露する団員と子どもたち

竹楽器協演 古里の音色

萩で全国大会

住民手作り 児童ら披露

十八日に萩市で開催した、全国竹の大会（全日本竹産業連合会など主催）で、竹の柔らかな音色が会場を包み込んだ。竹を「音楽」に生かそうと五月に発足した竹製楽器の県民楽団「やまぐちバンブーオーケストラ」が演奏を披露。参加者には、市内のボランティアが手すきした竹紙をプレゼントするなど、住民が手づくりで盛り上げた。

（一面関連）

竹楽器は、下関市王喜地区の住民らが、里山の八奏者の柴田旺山さん保全を目的に伐採した竹が素材。約二カ月かけて、高さ約三メートルあるシエログやマリンバなどの打楽器や、笛など八種類を手作りした。いずれも筒状の形を生かし、空洞部分の音を振るわせることで丸みのある音が出る。

三十四人の団員は、東

京を拠点に活躍する尺八奏者の柴田旺山さん（左）の指導で七月中旬に練習をスタート。十月から、地元の越ヶ浜小の四年生二十三人とも合練習し、本番に備えてきた。

この日は、「森の約束」「ふるさと」「世界に一つだけの花」の三曲を披露。訪れた人たちは、東アジアの民族楽器を手本にした珍しい楽器が奏でるハーモニーに、静かに

聞き入った。

「この楽団が、竹の素晴らしさを広める役割を担えるのではないかと、指揮者を務めた柴田さん、アンクルンという打楽器を担当した越ヶ浜小四年生は「竹がこんなにいい音がするなんて知らなかった。また演奏したい」と満足そうだった。

参加者には、市内のボランティアが一年以上かけて竹から制作した、はがきとほし入れのセットも、記念品として配られた。全竹連の杉田守会長（左）は「竹産業の未来を担う子どもたちも加わった、すばらしいもてなしですね」と喜んでいました。

図1 「中国新聞」（平成16年11月19日朝刊）

国民文化祭へ軽やかな響き



アンクルンを手に練習する王喜小の児童

バンブーオーケストラ

十一月に県内で開かれる「国民文化祭・やまぐち2006」に向け、下関市の王喜小学校の五、六年生四十七人が、バンブーオーケストラの本格的な練習を始めた。

下関市・王喜小児童 本格練習を開始

児童らは、国民文化祭のクランドフィオーレで「やまぐちバンブーオーケストラ」の一員として参加する。同小は校区内に竹の産地があることから、二〇〇四年にインドネシアの竹の楽器「アンクルン」の演奏に取り組み、同年設立された同オーケストラにも加わるようになった。

指導するのは、下関市の「しものせき・竹アンサンブル」の楽団員で常任指揮者の吉原達也・下関短大付属高教諭。アンクルンの楽器「アンクルン」

47人、巧みに

アンクルンを手に同小体育館に集まった児童を前に、吉原教諭が指揮をして、本番で披露する「森の約束」を演奏。吉原教諭から「テンポが速くなりすぎないように」などの注意もあったが、昨年度の後半から少しずつ練習をしていた児童たちは、一人一音ずつを担当するアンクルンを巧みに扱い、軽やかな音を響かせていた。

本番では、他の竹楽器とも一緒になり、約二百人の大オーケストラでの演奏になる。

図2 「西日本新聞」(平成18年6月23日朝刊)

感動鳴りやまず

県内各地で多彩なイベントを繰り広げ、百四十万人の来場者を迎えた国民文化祭。十二日、山口市で閉会祭があった。竹製楽器の眞民楽団が福島県の楽団と共演。来年の開催地、徳島県の阿波おどりも加わり、交流の輪が広がった。

(34面関連)



フィナーレで竹製楽器の温かな音色を披露する山口と福島のバンブーオーケストラ

竹の楽団共演 交流の輪

眞民楽団「よまぢちバンブー」の八人と、総勢二百八十人もぎやかに登場。最後は、オーケストラ。県内に多い竹で「世界に一つだけの花」「森歌やダンス、伝統芸能などに出演を音楽に生かす」と二〇〇四年の約束を演奏。五千人の来場者たちも竹製カステネットに結成し、尺八奏者の柴田旺山さんの指導で練習を重ねた。

この日は、福島県民でつくる「つづくまバンブーオーケストラ」に阿波おどり約七

(奥田美奈子)

図3 「中国新聞」(平成18年11月14日朝刊)

「しものせき・竹アンサンブル」新聞掲載記事（図5～7）

夕焼けの中 音色響く

角島で野外コンサート

下関市豊北町の角島で24日、アマチュア楽団らによる夕焼け野外コンサートが開かれ、暮れなすも響灘をバックに優しい音色が響き渡った。



下関地域づくり推進実行委員会（委員長＝原和人・下関21世紀協会理事）が「古里の素晴らしい自然を体感して」と初めて企画。市民ら約300人は夕焼けの中の音色がロマンチック

夕日を浴びながら、響灘をバックに演奏する「しものせき・竹アンサンブル」のメンバー

人が角島大橋を渡って駆けつけた。

コンサートは1時間。先頭バッターの竹楽器楽団

「しものせき・竹アンサンブル」の男女20人が、西目に照らされた海岸近くのステージで、「古里」な6

曲を柔らかいメロディーで演奏。続く下関市文吹楽

楽部も優雅な旋律でリレーした。

同市長府古城町の主婦、

は「夕

ック」と感激していた。

この日は、海産でのヨガ体験や、打ち上げ花火（50

発）も行われ、助けた人たち

は、さわやかな風を感じられた角島の夕方のひとときを楽しんでいた。

図5 「読売新聞」（平成18年9月25日朝刊）

◆竹楽器の不思議な響き

地元の竹で作った竹楽器を奏する「しものせき・竹アンサンブル」（村田悟代表）の演奏会が8日下関市の国民宿舎海峽ビューしものせきであった。約60人の聴衆は竹だけで作ったとは思えない多彩な音色に驚きながら聴き入った。



温かな竹の音色に聴衆もうっとり

市民団体「下関の食と文化を再発見する会」が主催。村田代表らは里山保全のため群生する竹の伐採を続け、3年前からその竹で楽器を作って演奏している。海峽ビ

ューから地元食材の昼食も振る舞われ、聴衆は「私たちが奏するのは舌鼓」と満悦の様子だった。

図6 「毎日新聞」（平成19年10月9日朝刊）



図7 「山口新聞」(平成18年10月5日朝刊)